学会抄録

第467回日本泌尿器科学会北陸地方会

（2020年9月5日（土）　WEB開催）

根治的腎摘出術から26年後に顎下腺，28年後に肺に転移した腎細胞癌の1例：奥村悦久，福島正人，青木芳隆，伊藤秀明，横山　修（福井大）　72歳，男性．1992年に38×35 mmの右腎腫瘍に対して根治的右腎全摘出術を施行され，病理結果はRenal cell carcinoma，clear cell type，cystic type and alveolar type，pT2b，expansive type，G1，INF alphaであった．5年間の経過観察後に終診となったが，26年後の2018年3月に右顎下に3 cm大の腫瘤を認めるようになり耳鼻咽喉科を受診された．右顎下腺腫瘍摘出術を施行し，病理結果はMetastatic clear cell renal cell carcinomaであった．腎細胞癌顎下腺転移の診断で経過観察中，2019年12月の胸部CTにて左肺に数mmから1 cm大の腫瘤影を3箇所認めたため，2020年1月に胸腔鏡補助下左肺部分切除術を施行した．こちらも病理結果はMetastatic clear cell renal cell carcinomaであった．術後6カ月経過時点ではさらなる再発は認めていない．腎細胞癌は稀に晩期再発を来たすことが知られているが，20年以上経過した後でも再発しえる可能性があるため，根治的治療後も長期間の経過観察が必要となる場合もあることが示唆された．

乳頭状腎細胞癌の背景に乳頭状腺腫が多発した1例：堀　智裕，岩本大旭，門本　卓，八重樫 洋，飯島将司，川口昌平，野原隆弘，重原一慶，泉　浩二，角野佳史，溝上　敦（金沢大）　63歳，男性，健診で左腎腫瘍を指摘され当科紹介受診となった．MRIで中極背側に20×17 mm，下極に14×13 mmの境界明瞭な腫瘤を認め，後腹膜鏡下左腎摘除術を施行した．これらの腫瘤は乳頭状腎細胞癌であったが，他にも乳頭状腺腫に相当する小結節を多数認めた．乳頭状腎細胞癌と乳頭状腺腫には形態の類似性があり，関連した病変である可能性が示唆された．過去の報告では乳頭状腺腫が対側腎にも出現する場合も指摘されている．また乳頭状腺腫は乳頭状腎細胞癌の前駆病変である可能性も示唆されているため，対側腎のフォローは重要であると考えられた．

PDD陽性となった膀胱Nephrogenic adenomaの1例：鳥海　蓮，纐纈佳樹，浦田聡子，大筆光夫，宮城　徹（石川県中）　［症例］70歳，男性．［現病歴］2017年8月，画像検査で膀胱癌，前立腺癌を疑われ当科紹介．TURBtと前立腺生検を同時施行し，膀胱癌pT1，前立腺癌と診断された．前立腺癌はホルモン療法と外照射で治療され，膀胱癌は翌年再発後BCG膀胱注入を実施．さらに再発を認め，2020年1月PDD（光線力学診断）併用TURBtを施行，PDD陽性部位を認めるも病理診断はnephrogenic adenoma（以下NA）であった．［考察］NAは尿路に発生する稀な良性腫瘍であり，腎尿細管に似た腺管構造を持つことから命名された．本邦の報告をまとめると，8割以上が膀胱発生であり，そのほとんどが侵襲または炎症の既往を有する．PDD併用TURBtは偽陽性率の高さが指摘されているものの，PDD陽性となったNAは自験例が初の報告である．［結語］PDD陽性となった膀胱nephrogenic adenomaを初めて報告した．

当院におけるロボット支援腹腔鏡下腎部分切除術の検討：森田展代，國井建司郎，牛本千春子，井上慎也，中澤佑介，福田悠子，菅幸大，近沢逸平，田中達朗，宮澤克人（金沢医大）　当院では，2018年4月よりロボット支援腹腔鏡下腎部分切除術（RAPN）を開始した．2020年8月までの初期経験について報告する．［対象］2018年4月～2020年8月までに当院でRAPNを施行した33例．平均年齢63.4歳，男性22例・女性11例，患側は右16例・左17例，RENAL scoreはLowが17例・Intermediateが12例・Highが4例であった．経腹膜アプローチが28例・後腹膜アプローチが5例で，32例に術前尿管カテーテルを挿入している．［結果］手術時間は平均299分，コンソール時間は平均170分，出血量は平均170 ml，阻血時間は平均20分であった．術後合併症は，1例に尿漏を認めた．切除断端は4例で陽性を認めた．［結論］RAPNは初期症例でも安全に施行可能であった．Cancer controlや腎機能に関しては，長期の観察が必要である．

前立腺生検の陽性コア率は前立腺癌予後予測マーカーとなる：加納洋，泉　浩二，門本　卓，岩本大旭，八重樫 洋，飯島将司，川口昌平，重原一慶，野原隆弘，角野佳史，溝上　敦（金沢大）　［目的］前立腺生検の陽性コア率（P core %）が前立腺癌予後予測マーカーとなるかを検討した．［方法］当院で前立腺生検を行い，前立腺癌と診断された255人の診断時のP core %と背景因子との相関，また各因子の前立腺癌特異的生存率を比較し，危険因子について解析した．［結果］フォローアップ中央値は37.9（1.3～77.4）カ月であった．P core %とPSA値，GS，T・N・M stageに相関を認めた．癌特異的生存率に関しては，① P core %が60%以上，② T3以上，③ GSが8以上，④ PSAが100 ng/ml以上，⑤転移ありの5因子で有意に低下していた．Cox回帰分析によりP core %が60%以上と転移ありの2因子が独立した危険因子と考えられた．［結論］P core %は前立腺癌の予後予測マーカーとして有用であると考えられる．

当院における前立腺癌に対するデガレリクス3カ月製剤の治療経験と使用状況：七谷直紀，池端良紀，坪井康真，菊島卓也，大島記世，安川　瞳，池端良紀，伊藤崇敏，西山直隆，渡部明彦，藤内靖喜，北村　寛（富山大）　［目的］2019年6月にデガレリクス3カ月製剤が保険収載され，本邦で普及しつつある．今回われわれは，当院でデガレリクス3カ月製剤の投与を行った．前立腺癌患者における効果および有害事象について検討した．［方法］2019年8月～2020年3月に富山大学附属病院において前立腺癌に対してデガレリクス3カ月製剤を投与した19名を対象とした．投与前，投与1，3，6カ月のPSA低下率および，有害事象について検討を行った．［結果］年齢は中央値70.5歳（62～83歳），投与1カ月でのPSA低下率は中央値93.9%（84.9～98.7%）だった．投与3，6カ月におけるPSA低下率は90%以上だった．有害事象については19名中13名（61.8%）で注射部位における皮膚症状（疼痛4名，硬結4名，発赤3名，腫脹1名）が認められ，3名（15.7%）でホットフラッシュが認められた．［考察］デガレリクス3カ月製剤においても，1カ月製剤と同様にPSAの低下を認め，有害事象およびその頻度も同様であった．デガレリクスによるアンドロゲン遮断療法を導入した前立腺癌患者において，3カ月製剤は有用な治療と考えられた．

進行性尿路性器癌において癌治療終了に関する患者本人の意思決定が予後，緩和的治療に与える影響：土山克樹（福井大，伊部），**堤内真実，小林久人，関　雅也，稲村　聡，多賀峰 克，福島正人，青木芳隆，伊藤秀明，横山　修**（福井大）　［目的］尿路性器癌の治療終了に関し，患者本人の意思の有無がその後の予後に与える影響を検討．［方法］対象：死因が腎癌，膀胱癌，前立腺癌であった167例．癌治療終了の意思決定への患者本人の関与の有無が治療後の生存期間，死亡場所に与えた影響を検討．［結果］意思決定は本人：100例，家族：67例が施行．癌治療後の生存期間は本人群：145.5日（7～3,069日），家族群：23.0日（0～930日）で，本人群で有意に長かった（$p<0.001$）．死亡場所は当院：84例（本人群：42例，家族群：42例），他施設・自宅：83例（本人群：58例，家族群：25例）であり，他施設・自宅での死亡が本人群で有意に多かった．［考察］患者本人の意思の有無は癌治療終了後の予後や死亡場所と関連しえる．

当科におけるロボット支援仙骨膣固定術の臨床的検討：江川雅之，林　哲章，一松啓介（砺波総合）　2020年4月にロボット支援仙骨膣固定術（RASC）を開始し，8月までに14例を施行．頭低位20度でペーシェントカートをcentral dockingし，ダビンチポート×2，助手用ポート×2およびカメラポートの計5ポートを使用（経膣操作なし）．シングルメッシュで膣断端と膀胱瘤を修復し，直腸瘤はnative tissue repairを施行．平均手術時間178分（143～241），平均コンソール時間120分（99～142），出血少量，術中合併症なし．RASC開始直前までに連続施行した腹腔鏡下仙骨膣固定術（LSC）×14例と比較．患者背景因子および手術パラメーター（手術時間，気腹時間，出血

量，入院期間）ともに有意差なし．導入初期の RASC と130例経験した後の LSC は，同等の周術期成績であった．

外傷性尿道損傷に対する尿道形成術の臨床的検討：石浦嘉之，新倉晋，浅利豊紀（富山労災），**大筆光夫**（石川県中），**押野谷幸之輔**（公立松任）　［目的］外傷性尿道損傷に対する尿道形成術は専門性が高く施設集約化が図られる一方で実施施設の地域偏在がみられる．COVID-19 が社会的問題となり人の移動自粛が求められる現在，医療均てん化の意義は高まっており，北陸における当院での取り組みを報告する．［方法］平成26年～令和 2 年の間に当院で 4 症例に対し尿道狭窄部切除ならびに尿道端々吻合術を施行．4 例中 1 例は骨盤骨折に伴う膜様部尿道断裂，2 例は騎乗型会陰部打撲に伴う球部尿道断裂，1 例は非断裂の騎乗型球部尿道損傷であった．［成績］全症例で術後明らかな狭窄なく尿道の開存が得られた．［結語］少数ながら良好な成績が得られ，均てん化を目指し今後も本疾患に取り組み続ける．